

修道誓願 51 年

イ：インタビューー 節：マリア・ローザ節子

イ：こんにちは、シスターの洗礼名、Firstname、今の使徒職を教えてください。

節：マリア・ローザ節子です。共同体の責任者として、シスターズの霊的生活、日常生活に関する奉仕をしています。

イ：20 数名の共同体の責任者は、日々の奉仕も多種多様でしょうね。ところで、Sr. 節子は、小さい頃はどんな子どもでしたか。

節：活発で観察力があるほうで、いつも先が見えてしまう子でした。クラスのまとめ役的なところもあって、先生方にもかわいがられていました。

イ：小さな頃から、教師としての資質を備えていらしたような感じですね。学生時代は、どんなことに関心をお持ちでしたか。

節：小学校 3 年生の時に、教師になりたいと思っていました。同じころ「人はなぜ生きているのか、なぜ死ぬのか」といった疑問も持ち始めました。そんな私に、中学生になった時校長先生が、「桜の聖母に行ったら、その質問の答えがあるかもしれない。」と勧めてくれました。桜の聖母の高校に入学し、確かに答えと出会いました。Sr. 秋山恵先生（コングレガシオン・ド・ノートルダム修道会：以下 CND）から「神の存在、そして自分の存在」の話をお聞きした時、目からウロコが落ちる思いでした。小さいころからの疑問に答えを見つけた私は、宗教の授業に夢中になり、カトリック信者の生徒たちが集まる課外宗教のクラスにも参加させてもらえることになりました。

イ：無垢で素直な子どもの心には、神様の存在がスーッと入っていくのですね。高校卒業後はどうなされたのでしょうか。

節：高校卒業前に、両親の反対を押し切って洗礼を受けました。まだまだ、封建的で田舎の出身でしたので、周囲の目が厳しく、「あの黒い服（当時の修道服）を着た人になってはいけない」と反対されていました。また、進学に関しても、「女性が大学に行ったらもらい手がない」と言われました。シスター方に相談し、聖母短大へいくことを勧められました。英語科か家政科か、どちらも苦手な私にはとても合わないと思いました。‘誰からも束縛されたくなく、また古い習慣からも解放される自由’に憧れていました。そこで、自分の力でいける地元の福島大学を受験し、「受かったらシスターになろう」と密かに決心していました。大学 2 年の時に父が亡くなり、経済的な理由から大学を辞めるようにと言われたのですが、修道院に寄宿し奨学金を受けながら、修道院の台所の手伝いや家庭教師をして大学生活を続けました。大学 3 年生の頃は、近隣のいくつかの修道院を訪ね、どこが自分に合うのかを探しました。ピンとくる所はなく、やっぱり CND だと思いました。何よりも‘教育’という使命に、前進していく広がりを感じたからです。大学の卒業式に母は来てくれましたが、修道女として修道院に入ることを決めていた私と、一言も言葉を交わすことなく帰って行きました。母の「修道女になることは大反対」という暗黙の意思表示だったのではないのでしょうか。

イ：お聞きしていると、修道院に正式に入会する時は、さぞ大変だったのではないかとお察ししますが。

節：その通りです。入会許可をもらうために家を出る前の晩は、一睡もしないで家族の前で粘りました。

翌朝、兄は何も言わず、いつも見送っていた母は私の顔を見ることなく、どこかに出かけて行ってしまいました。小学校4年生の弟は「行かないで！」と。当時、入会の時には、自分の布団一式など準備が必要だったのですが、卒業したばかりの私にはお金がありませんでしたから、修道院で働いていらした方々に工面していただきました。今でも感謝しています。

イ：かなり若いころに、ご自分の将来を決断なさっていますが、なぜ他の選択肢ではなく修道生活を志されたのでしょうか。

節：高校1年生の時、家に来たお客様が私を見て「この子は、普通の生き方では満足しない子ですね。何か人に奉仕するような生活をするんじゃないですか。」とおっしゃって。それがとても心に残っていたんです。

イ：やっとの思いで入会された修練期の3年間、どんなことに喜びや苦しさを見出されましたか。

節：体の衰弱や病気に、かなり悩まされました。このままでは家に帰されるかもしれないという思いも頭をかすめました。心はいつも平和でした。この頃、私を家に戻そうとして、祖母をはじめ家族、親類の人たちが、「花嫁衣装も着せずに、お父さんに申し訳ない。」と泣き落としにかかっていたのですが、それでも私は、初誓願を宣立しました。

イ：初誓願後、派遣先で最初に直面した困難は何でしたか。

節：体が弱いことでみんなと一緒に行動ができず、淋しい思いをしましたね。それでも修道服をいただいたことが嬉しくて、友達に報告しました。初誓願の2年後には、小学校に派遣されましたが、ここでも私の体の弱さは変わらず、同僚のシスターが、私のためにいつもミルクセーキを作ってくれました。本当に助けられました。

イ：ではこれまでの修道生活の中で、もう無理かもしれないと感じた苦しさを、どう乗り越えてこられたのでしょうか。

節：みなさんそうだと思いますが、長い修道生活の間にはいろいろなことがありました。そんな時支えになったのは、シスターたちがかけてくださった言葉や祈り、もちろん神様の助けでしょうね。祈りの中で、「私を置いてどこへ行くのか」。また、ある姉妹からは「あなたは、ここを出る人ではない」とも言われました。私自身も「神様から離れない。」と決意していました。

イ：神様はもちろん、姉妹の支えがあってこそ、今日まで来られたのですね。修道生活に感謝していることや喜びを聞かせてください。

節：今挙げたことに加えて母が、この生活をしている私を理解してくれたことでしょうね。まだ黒い修道服を着ていた頃、「その服では、家に近づかないでほしい。」というようなことも言われましたが。それでも、後に母は、「お前だけが娘だね。」なんて言ってくれたことがあります。嫁ぎ先に気がねをする必要のない娘だからでしょう。

この生活の喜びは、神様と共にいるという確信があれば、現実に翻弄される時でも、祈りの中で、心に静けさや平安を感じられることです。

イ：現実には、神様が内在する私たちの内面までかき回せないということですね。CNDの未来に関してはどうなふうにお考えでしょうか。

節：新しい入会者には、粹にはまらない自由さで、自分の香りを大切にする、魅力あるシスターになってほしいと思います。人が、「どうして、シスターになったの？いいお母さん、いいおばあちゃんになれる人なのに…」と思うような。謙虚で、人を気遣うことのできるシスターであることが大事でしょうね。

イ：これまで、シスター節子を支えてきた聖書の言葉は何ですか。

節：「恐れるな、私はいつもあなたと共にいる」です。この言葉にどれほど涙し震え、支えられたか分かりません。

イ：最後にCNDの創立者聖マルグリット・ブールジョワのどんなところに惹かれますか。

節：安住の地にいるのではなく、必要などころにはどこへでも出かけて行く姿勢です。このことは、単に外へ向かって出かけることだけを意味しません。たとえ高齢や病気で出かけられなくとも、人々に心を開くということだと思えます。

イ：最後に、もう少し、お話をお願いします。

節：そうですね。聖書の中に、「罪深い女」の話がありますが、そこでは、「赦されることの多い人ほど、自分の弱さに気づき、神様の愛の深さが分かる」ということが語られています。私たちは、自分では自分の悪い癖を治せず、つける薬もありません。だからこそ、共に歩んでくださるイエス様が必要なんです。私の醜いところに、イエス様が赦しの手を当ててくださっていることが分かります。

イ：ありがとうございました。確かに、「赦しの秘跡」で毎回同じことを告白している自分には、うんざりさせられることがあります。まったくつける薬がありません。でも、神様にとっては、できの悪い娘ほど可愛いのだと信じて、私もこれから修道生活50年を目指します。



インタビュアー：シスター高橋香久子
シスター高橋もと子